

Tassili n'Ajjer





2008/12/26 ジャネットの夜明

Akba Tafilalet



Tassili n' Ajjerへのアクセスはタフィラレ峠が一般的であるが、多くの物資を必要とする場合は4日ほど遠回りとなるが駱駝が入れるアカサオ峠からとなる。



麓は海拔1060m程度(Google Earth、以下同様)、台地の入り口が1730m程度で、標高差670m程度を登ることとなる。途中平坦なところもあるが、高所恐怖症には少々厳しいところもある。台地に入ると地平線が見渡せる平坦な地表が続く。

Tamrit



牛飼時代 羚羊



牛飼時代

タムリット。狐人の壁画(細部)。牛飼時代 (0.42×0.25メートル)。1934年発見。

Tamrit

タムリットでの野営。ツアレグ族は、お茶を欠かさない。中国緑茶を、二つのポットを使って50cmぐらいの高さから何度も移し変えて泡立たせる。砂糖も多く使っているが、お茶の渋さに丸みがあって、疲労困憊した体には癒される飲み物だ。彼らは三番茶まで飲むのを慣習としている。子供たちには三番茶のみが許されているとのこと。

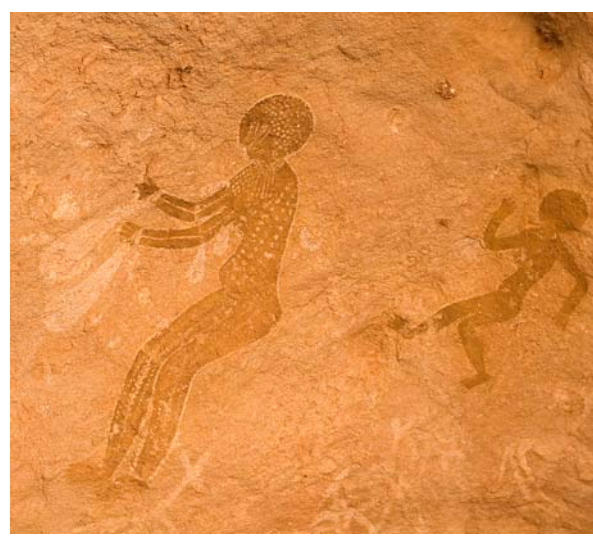
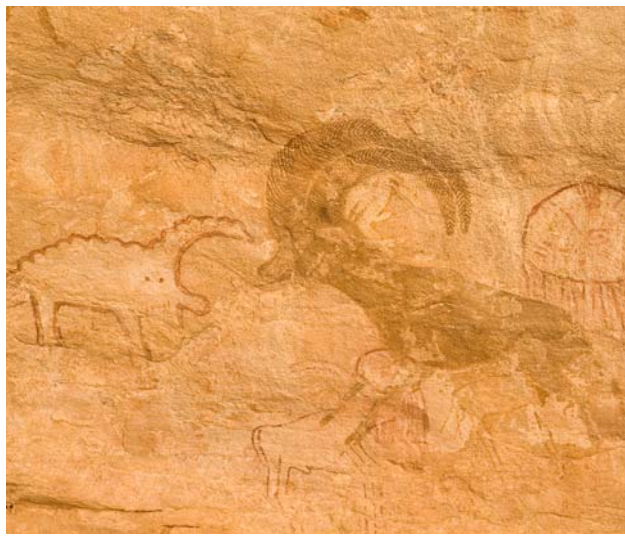


夜は満天の星。人工の光がないせいか、星の数は日本の何倍もあるように感じられる。流れ星が様々な方向から、異なるスピードで流れている。数時間ほどで20個近くを数えることができた。遠くで狼のような遠吠えが聞こえた。ジャッカルだろうか。

糸杉の谷 (Tamrit)



タマシエク語でタルーと呼ばれる糸杉。砂漠化する2000年以上前に根を張った糸杉だけが生き残っている。古いものは4000年以上と言われている。Tassili n' Ajjer全体で147本現存している。Tamritの糸杉の谷はWadi(涸れ川)沿いに14本ほど。



Tan Zoumaitak

円頭時代後期。瘢痕(刺青)のある男女、野羊、何なのか不明の動物、など。多くの絵が古い絵の上に重ねて描かれている。他のサイトでも同様の重ね描きが行われているが、あまり頓着はなかったようだ。

Tan Zoumaitak



牛飼時代



円頭時代

Initinen

牛飼時代





馬の時代。盾と剣を持った兵士達の戦い。四輪の馬車、馬上の兵士。二輪、四輪の馬車(戦車)は、リビアのアカクスからホガールまで広く見られる。アンリ・ロートは、地中海民族とリビア人から出た騎馬民族が紀元前1000年にはナイジェリアまで到達していたものと考えている。



駱駝の時代。馬の時代同様稚拙な絵が多い。古代タマシェク語のティフィナグ文字が書かれている。囲いの絵は家を示している。

Sefar Noir



円頭時代。三人の女性。頭から足元まで様々な装飾を纏っている。
黒セファールでは、表面が黒い砂岩が侵食された表面に描かれている。白セファールの砂岩に比べて表面が硬く、岩絵の劣化も比較的少ない。



円頭時代後期。細長い面を被った男性が3人と面を付けていない女性5人が一本の紐で繋がって踊っているように見られる。円頭時代には数少ない洗練された絵のひとつ。



ガゼル



円頭時代。この種の面は、現在の黒人の間にも存在しており、円頭時代の作者が黒人であることの証明ともなっている。



牛飼時代。



円頭時代盛期。女性像。



牛飼時代後期。ギリシャの影響が見られる。傷みが激しく、下半身と二人目の人物は完全に消えている。



牛飼時代。男性は左手を腰に当てて立ち、女性は家の内外で座っている絵が多い。



牛飼時代。 左は女性、中央は弓を持つ男性。



円頭時代。「魚を手につく巨神」
左手に持つのは魚とされていたが、最近の研究ではこの部分は巨神の一部ではなく後から別の絵として描き加えられたものの結果が得られている。今となつては、間違った題名となつた。

Sefar Blanc



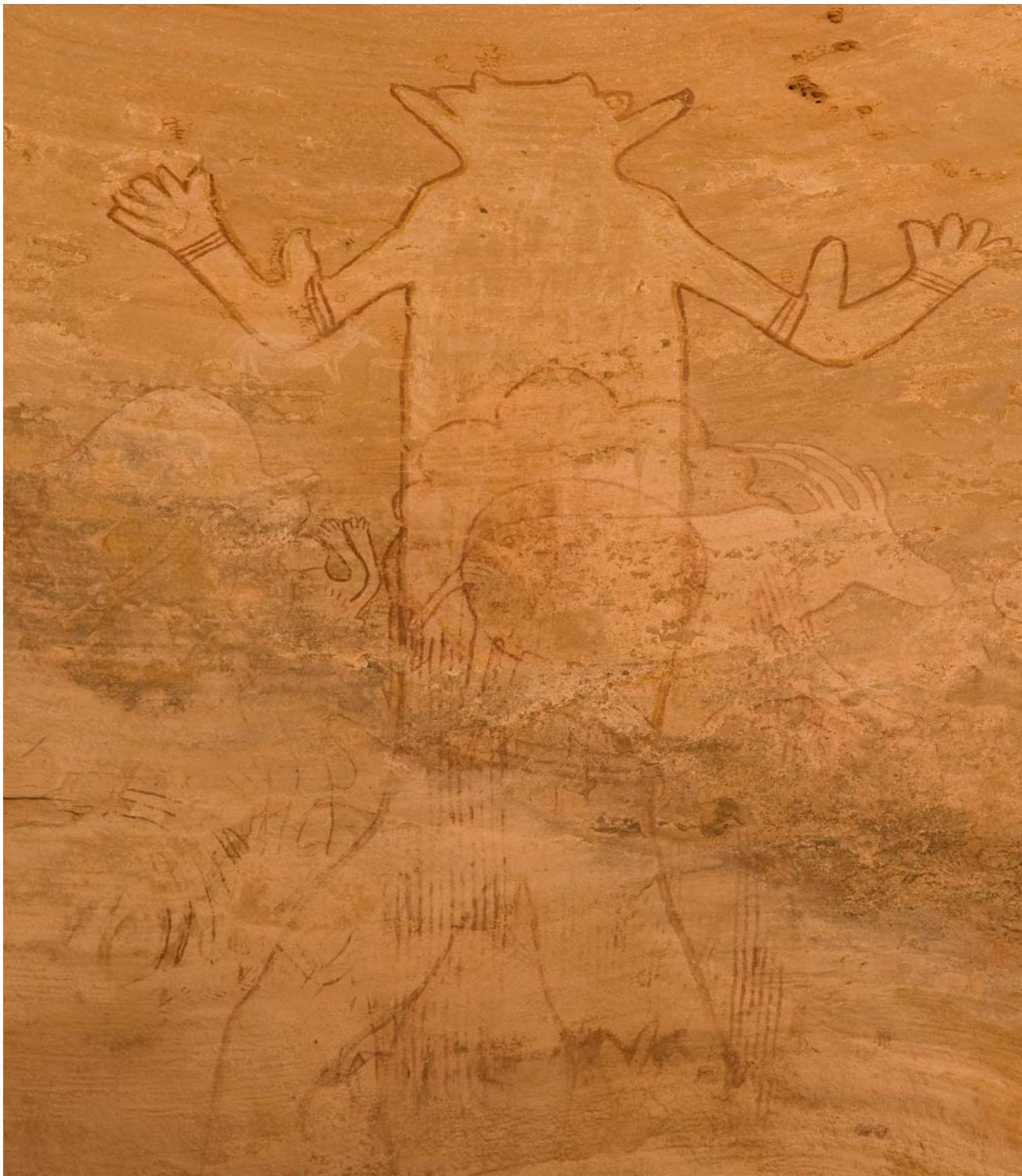
円頭時代。実物サイズを超える大きさの野羊が三頭。



円頭時代。巨人の足元には中くらい巨人が何人かいて小人の群集を従えているように見える。ガイドによると群集は猿とのことだったが、尻尾がないところから見ても人間と見るのが妥当ではないか。なんとも不思議な絵だ。



円頭時代。右の人物が何かを盗もうとして、左側の人物に捕まえられたようにも見えるが、どのようなシーンであるかはなぞ。宗教的な意味合いがあるのか、それとも生活の描写なのか……。興味は尽きない。



1969年富山治夫撮影の森本哲郎
ニス実験の翌年で、ニス跡がはっきりしている。
年数を経るほど差が分からなくなっているようだ。



円頭時代。 Grand Dieu=巨神。「白い巨人」

上下3mを超える巨人像の周囲には、拝むような仕草の円頭人たちが囲んでいる。
この壁画を使ってニスによる保存の実験が行われている。1968年にUNESCOの委託により二人の研究者がポラロイド社の薬液を使って部分的に塗っている。写真によっては明確に分かるものもあるが、今回の訪問時は日中の光線の関係か、かろうじて分かる程度。確かに保存状態には差があるが、有効な手段とは確定していない。
実験をするのであれば、なにもこんなに重要な壁画で行うこともないだろうに考えるのだが。



牛飼時代後期。左側の女性がかろうじて残っているが、右側の男性像は完全に消滅している。日当たりが良すぎるのが劣化を早めている。



牛飼時代。左右に分かれて牛を争っているのであろうか。戦いを描いた壁画では比較的保存状態が良い。右側で屈んだ姿勢の人物は女性。

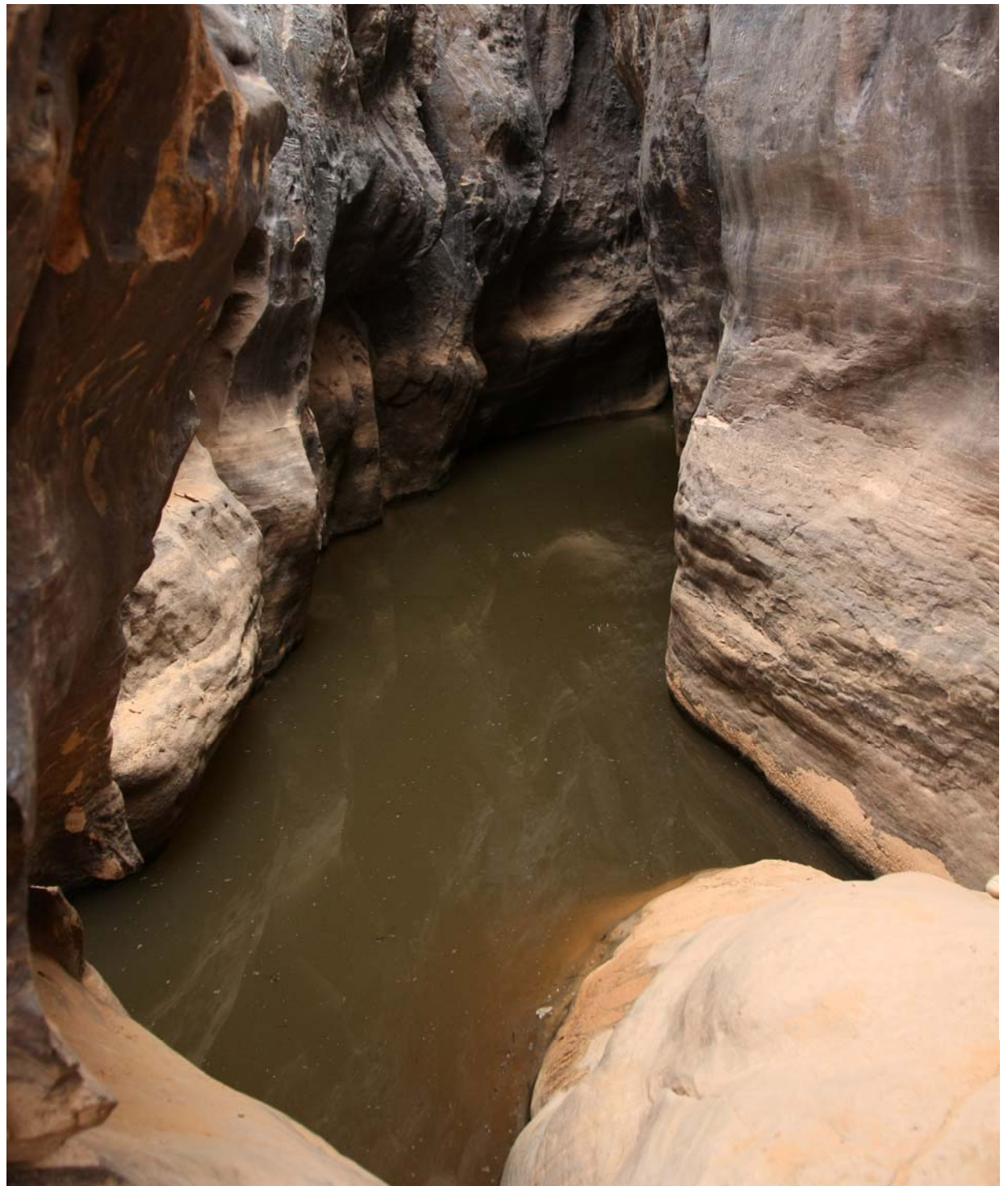


円頭時代。左ページの牛飼時代の戦いの図の下側に描かれている。野羊の群れとキリン。弓をもった円頭人もいる。



円頭時代。 巨人の顔の部分が目玉あるいは太鼓のように描かれた不思議な絵。回りには拝むような仕草の円頭人たちがいる。

Sefarのゲルタ(水溜り)。皿洗いなど料理用に使う水を調達。飲めると言うが、黄濁してとても飲む気にはなれない。



Tin Tazarift



砂岩は下部が抉られるように侵食するため、下部に穴が開いてアーチ状になっているケースも多く見られる。



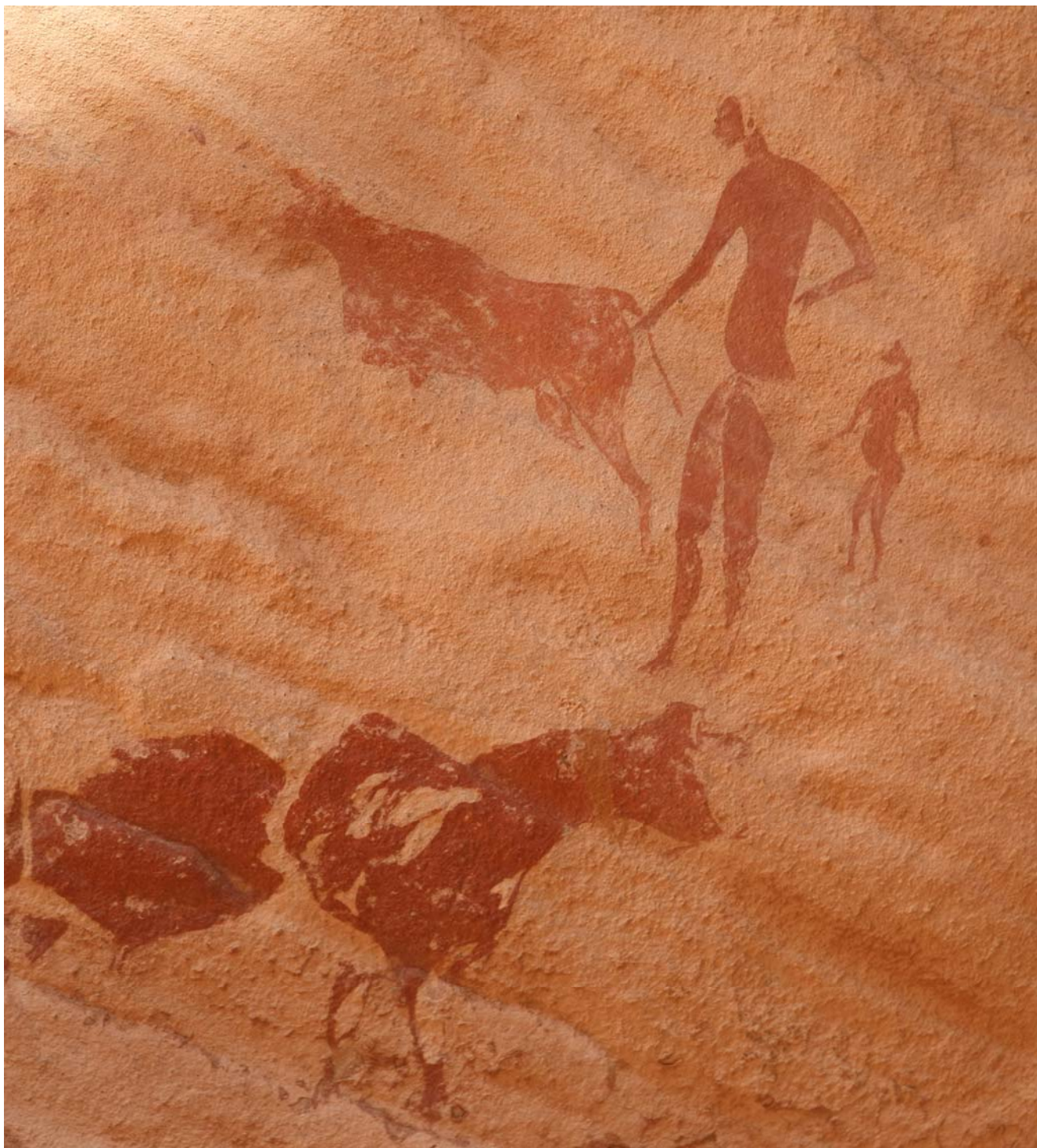
ガゼル



円頭時代盛期。「泳ぐ人」 左側に女性、その右に弓を持った男性。「泳いでいる」男性が3人、水に浸っているような男性。右には弓を持った男性。



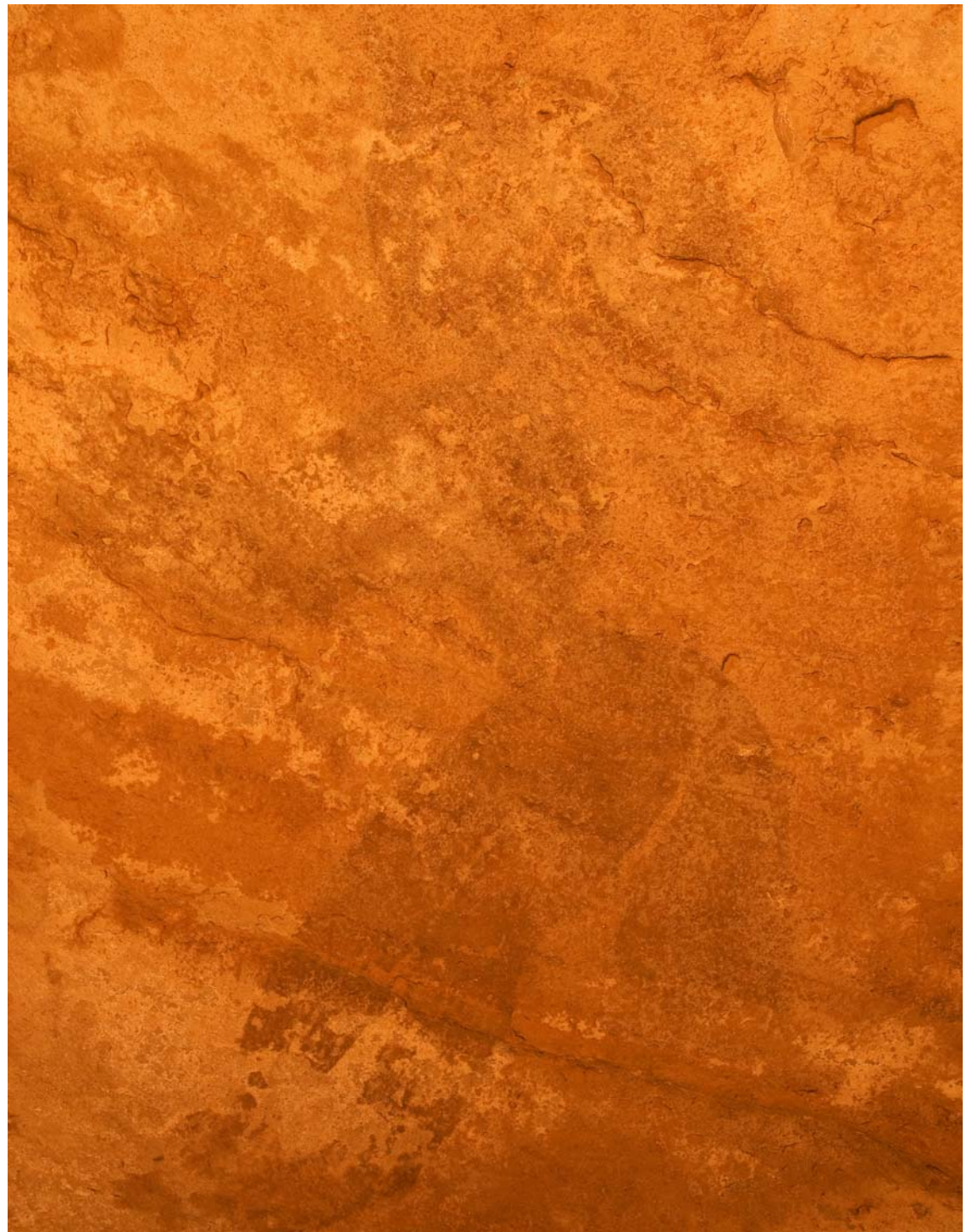
右側の「泳ぐ人」は体を半分水にを使って本当に泳いでいるようにも見えるが、左上の「泳ぐ人」は泳ぐと言うより「浮遊」しているようにも見える。このため「スピリチュアル、シャーマニズム的な世界での浮遊」とする説もある。



牛飼時代

お決まりの左手を腰に当てたポーズ。10cm程度の人物像だが目鼻が細かく描かれている。牛の描写も素晴らしい。

狐のような面を被った男性。
劣化が進んでいる。





牛飼時代。「船上の戦い」と呼ばれる傑作のひとつ。



船上の戦いの描かれた岩



円頭時代



手形は数多く見られる。このように腕を描いたものや、手をマスクにして絵の具を吹き付けたネガタイプの手形も多い。



ユニークな戯画。どのような意図で描かれたのか、想像力が刺激される。

Tin Kani

地平線が360度見渡せるところから、砂岩の岩が林立する地域と変化に富む景色。

砂岩は雨風による侵食で基部が浸食される。柱の基部が抉られて倒れそうになっているものも見られる。





駱駝の時代。盾と剣を持って戦う人々。

Tin Misesu





線刻画は、周囲に何もない平坦なところにある場合が多いようなのは何故だろうか。このようなところに住居があったとも考えにくい。

Ala Andaman



夕刻が迫り、ロバを草場から野営地に追い込む。



アラ・アンダマンからジャバレンへの途中にある147本目の糸杉。この近くには、ジャネットからリビアに抜ける通り道もあり、ニジェール人が多く徒歩で台地を通過している。Nigerから民芸品などを持ってトリポリで売りさばくらしい。29年前にもTafilalet峠で、トリポリ、パリを目指していたマリ人の一団に出会った。タッシリ台地は車では入れないが、交通の要衝となっているようだ。

Djabarren



ガイドによれば鱈とのことだが、この動物が何なのかは必ずしも判明していない。



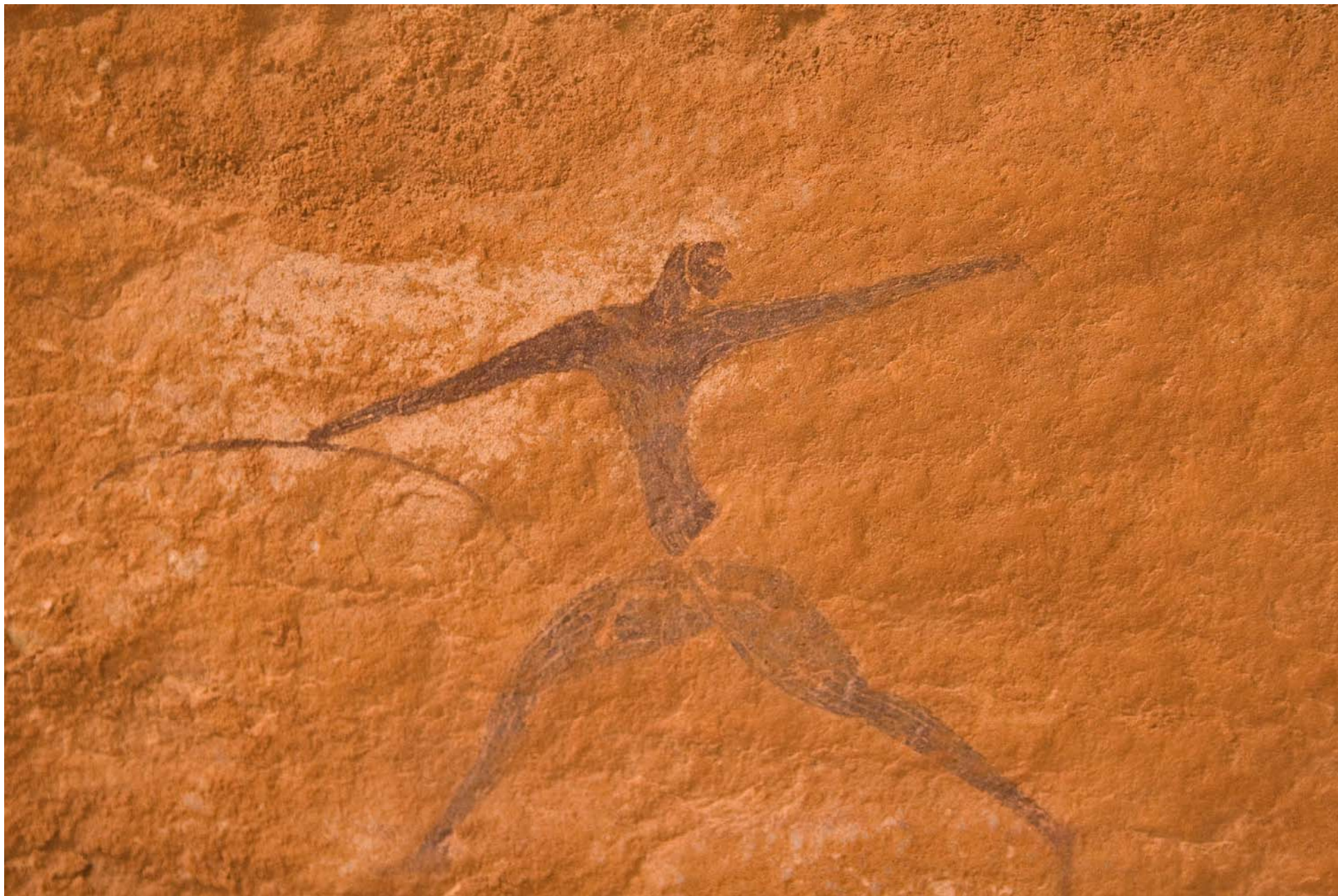
牛飼時代 狩獵



牛飼時代



牛飼時代。踊る男女のシルエットが美しい。日陰にあり、保存状態も非常に良い。



牛飼時代。10cm程度の小さな絵だが、目鼻も細部まで丁寧に描かれている。



牛飼時代。船上から矢を放つ場面がある一方で、船の傍らを牛がのんびりと歩いているなど面白い。



牛飼時代。



駝鳥



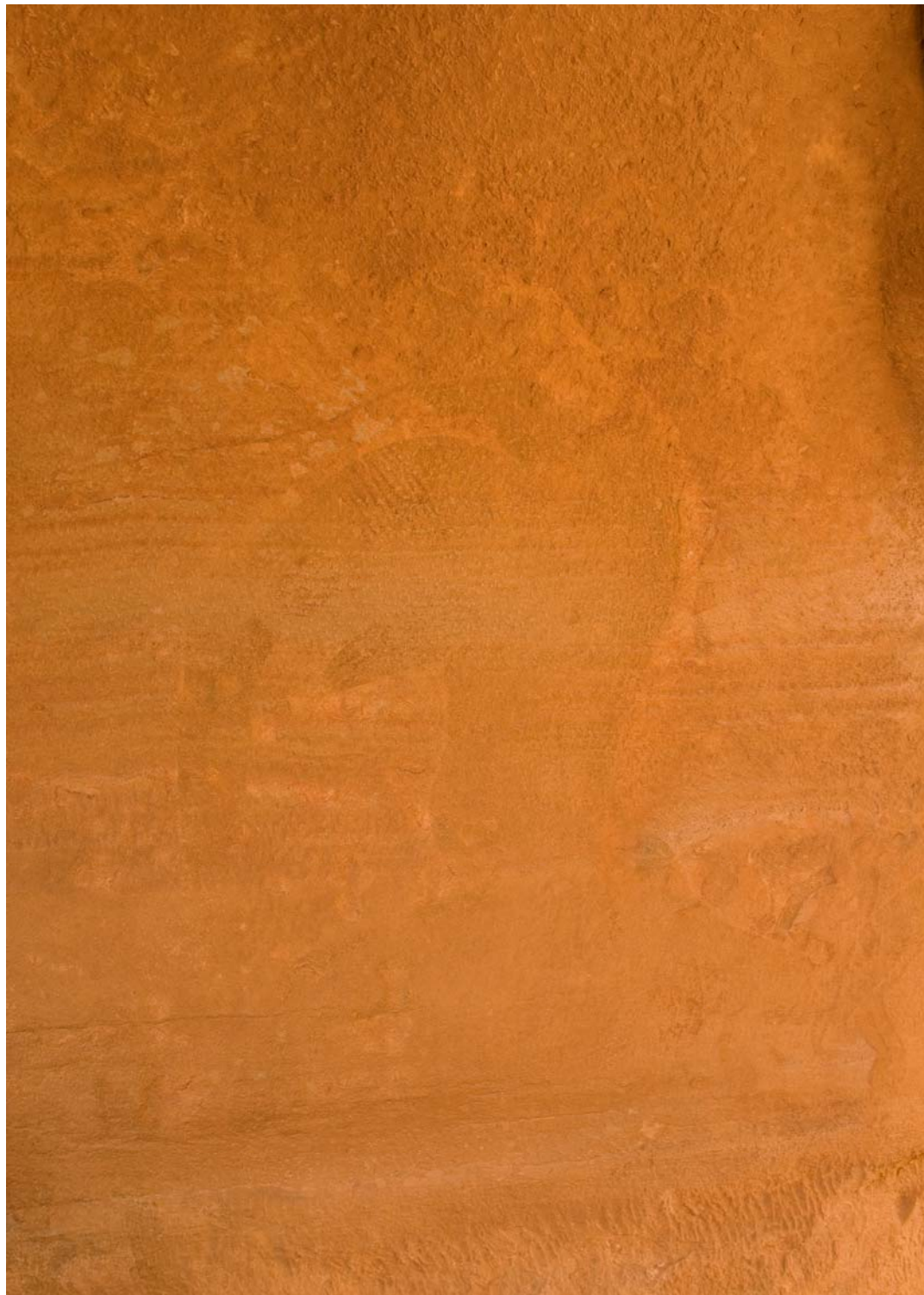
アリクイ?



円頭時代。ロートが「火星人」と呼んだ巨神像。



円頭時代。



牛飼時代後期
アンリ・ロートがリビアの女王の
名前からアンチネアと名付けた
貴婦人像。
美しい輪郭はかろうじて残って
いるが、消えてしまうのは時間
の問題のように思われる。



タツシリ台地最終日の夜
焚き火の回りに車座になってタムタムで盛り
上がる。





2009年元旦のご来光



アルーム峠 (Akba Aroum)は一気に麓まで降りる。日帰りでジャバレンの岩絵を見学する観光客もいる。麓に広がるのはアドメール大砂丘(Erg Admer)



ジャネットの変貌

1979年11月撮影



29年振りのジャネットの変貌は著しい:

飛行機: 8人乗り双発機 → 150人乗りジェット機が満員
 道路: 4駆用のみの未舗装 → アルジェリア全土に舗装道路網
 車: Land Roverが100% → Toyota Land Cruiserが100%

79年に訪れた時は、コンクリートの建物はオアシスの中心部にある観光案内所や役所程度で、民家は殆どが椰子の葉で編んだ粗末なものだった。オアシスの中心にあったホテルも、椰子の葉で作ったバンガローが並んでいた(上の写真)。

2009年1月撮影



泥の壁に椰子の葉の民家が密集していた山の斜面には、小ぎれいなコンクリート造りの家が並ぶ。立派な街となっている。近隣に天然資源がある訳ではなく、観光のみで発展してきたのだと言う。観光客といっても90年代はテロのため皆無、2001年以降受け入れ再開したものの常時100名もいるとは思われない。それでもこれだけ大きな街ができるのかと驚く。



店らしい店もなかったが、新鮮な野菜など豊富な物資が店にならんでいる。これらの店の殆どがアラブ人が経営しているようだ。29年前は、ターバンをしたツアレグ族と奴隷ハラティンの系統と思われる黒人しかいなかった。

タッシリ・ナジェールの植物



夾竹桃は僅かの水分があれば育つようで非常に強い植物。

アカシア。涸れ川で見かける木は殆どがアカシア。種類は多いようだ。

トルザ。葉に毒があるとのこと。ジャネットでは多く見かけたが、タッシリ台地ではあまり見かけない。



タマシエク語でチェザルジャーレ。お茶代わりの香草として、さまざまな病気に効く薬草として使われる。

タッシリ・ナジェールの動物



モラモラ。この鳥は来訪者の到来を告げると言われており、ツアレグはお茶の準備を始める。

野生の駱駝は台地で3回ほど見かけた。
上の穴はねずみの巣。



台地上で見かける動物は非常に少ないが、足跡は至る所にあり、種類も豊富。ジャッカル、野羊、狐などが生息している。ジャネットでは豹が捕獲されたこともある。

時代区分

アンリ・ロート以降の研究者の時代区分も、大枠ではロートのものと大きくは変わらない。ロートの時代区分をベースに区分した。

円頭時代(狩猟民時代)

紀元前6,000年～紀元前4,000年程度。年代検証ができているもっとも古い絵は紀元前6,000年前後。紀元前8,000年ごろからとする説もある。

岩絵に表れるお面や癍痕状の刺青などから黒人が住み着いていたものと考えられている。

円頭が特徴の絵が多く、内容的にも宗教・祭祀に関わるようなものが多い。面や面を被った人物の絵も見られる。また、巨人像や巨大な動物の絵も多い。

初期の絵は絵画的には稚拙なものが多いが、後期のものでは洗練された絵も見られる(17ページの踊る男女など)。

牛飼時代

紀元前4,000年～紀元前1,500年程度。

円頭時代とは異なる人種と考えられており、ナイル上部地域から来た民族との説が強い。

牛、狩、戦争など生活を描いた自然主義的な絵が殆ど。緻密で躍動感に溢れた絵が多い。後期のものでは、エジプトやギリシャの影響を窺わせるものもあり、アンチネアなど美しい絵がある。

馬の時代

紀元前1,500年～紀元程度。

乾燥化が進み、牛飼人は南に移動した可能性が高い。代わって地中海地域から騎乗民族が進出していた。

絵の内容は、騎乗の兵士、馬車、戦争などで、稚拙な絵が殆ど。

駱駝の時代

紀元以降。

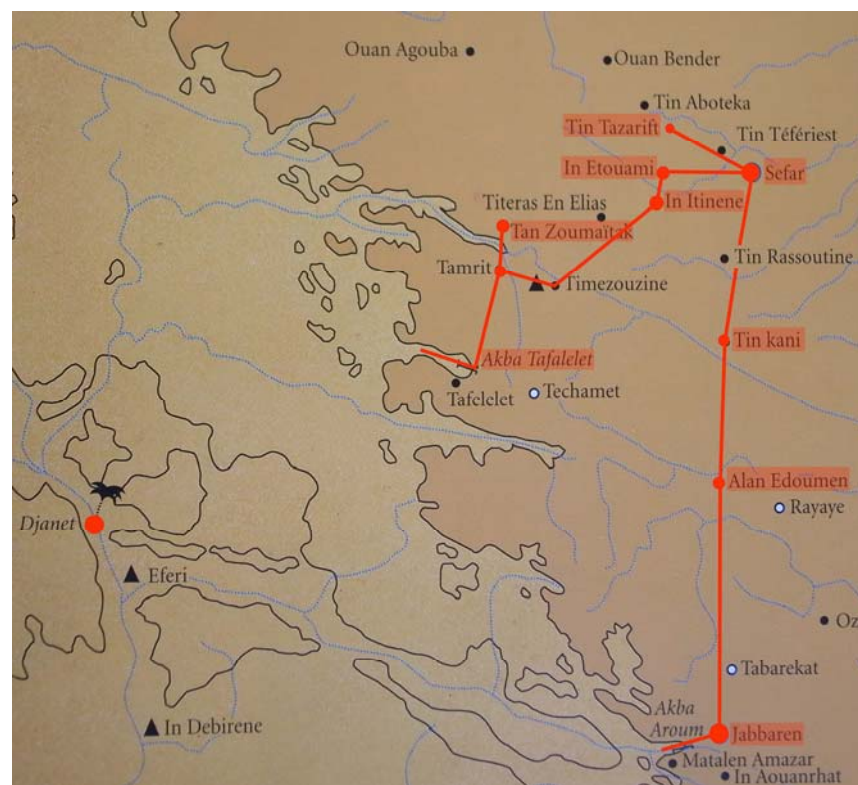
サハラが砂漠化したため移動手段は駱駝となる。

絵は、稚拙なものが多く、駱駝と家などが描かれ、古代ティフィナグ文字が書かれている。

Tassili n' Ajjer - タッシリ・ナジェール

タマシェク語で「川のある台地」を意味する。壁画から窺えるように、川が流れ、野生動物や家畜に恵まれた豊かな土地であったに違いない。

訪問地及びコース地図 (L' Art mysterieux de TETES RONDES du Sahara掲載の地図より)



アンリ・ロートの功罪

タッシリ・ナジェールの岩絵の存在とその価値を世界に知らしめたのはアンリ・ロートであるのは間違いなく、その功績は大きい。民俗学、考古学的知識に基づく分析も一流で、現在でもその価値は揺るがない。

しかし、ロートの調査隊が1955-56年に実施した岩絵の原寸コピー作成時に、「濡れたスポンジで表面の汚れを落したことが今日の劣化を加速させた」と批判されている。アルジェのジャーナリストZaid氏、ガイドのBalca氏は、ロートが岩絵を傷めた元凶と糾弾している。1956年のロート隊に参加した映画家・写真家のJean-Dominique LAJOUXもこの手法が絵を傷めたとしている。Tadliss N' Sahraもその著書 *L'Algerie Civilisation anciennes du Sahara* (2005)の中でロート隊のスポンジクリーニングの写真を掲載して批判している。

一方で、2007年に出版されたFrancois SOLEILHAVOUPの *L'Art mysterieux des TETES RONDES au Sahara*の中で、Henri-Jean HUGOTは、「ロートに対する批判に科学的根拠はない」と擁護している。SOLEILHAVOUP自身は、この点に直接言及していないがHUGOT同様の見解と思われる。

ガイドによれば、消えかけている絵は日当たりが良く、雨の水が垂れやすいところが多い。「消えかけた絵」を観察すると、表面に被膜が形成されているように見えるものと、「アンチネア」のように本当に消えつつあるように見えるものがある。前者であれば問題ないが、後者の場合は致命的とも言える。後者がスポンジの影響を受けているかどうかは、明確に結論付けられない。

保存の試みも行われているが、成功しているとは言えない。SOLEILHAVOUPによれば、1968年UNESCOの委託を受けて、二人

の研究者がPolaloid社製のニスで実験をしている。セファールの白い巨人の壁画の一部、三箇所はこのニスを塗っている。巨人の下腹部の向かって左側から拝む人の部分に塗られているが、実物では殆ど気が付かない。SOLEILHAVOUPの写真では明確に相違があり、周囲の薄い背景に比べて濃い茶色が浮き出ている。訪問時の日中の光線によるものか、その後なんらかの処理をしたのかは不明。このニスは除去可能なものであると言う。壁画右側の野羊の前足の付け根の部分は現在でもニスの部分が良く分かる。なぜこのような重要な壁画で実験をするのか理解しがたい。重要性の低い絵で様々な実験をすべきではなかろうか。

他に、ティン・タザリフトとセファールで2箇所ニスで処理した絵が見られた。ガイドからは「ロートが傷めたものだ」と説明されたが、巨人と同じ時期の実験の可能性が高いと推測。



スポンジクリーニングをするロート
隊のメンバー



特殊ニスによる保存実験

顔料

ガイドによると岩絵に使われたと推測される顔料は次の通り:

赤: テフェテストウ、ガゼルの血、乳

黄: マカラ、乳

白: 乳



テフェテストウ(赤)とマカラ(黄)が表裏一体となった石が多い

ジェブリーヌ(1890or1892-1981)

アンリ・ロートを案内したガイド。タッシリ・ナジェールの岩絵のありかを知り尽くしており、ロートの「発見」もジェブリーヌなくして成り立たない。

ツアレグ族の間では今でも尊敬を集めており、「ジェブリーヌ祭」と言う祭りが例年開かれている。近郷から駱駝使いが集まり、駱駝ダンスの競技などが行われているとのこと。

ジェブリーヌはツアレグ族では例外的に90歳という長寿を全うした。

Balca(ガイド)42歳



ジェブリーヌの兄弟を母方の祖父に持つ。9人兄弟の4人目。妻一人に5人の子供。二人目の妻を娶ることを考えている。

13歳の時から父親に付いてガイドの仕事始めた。テロのため観光客の来なかった90年代は工事現場で働いて糊口をしのぎ、2001からガイド業を再開し

た。

Balcaの家族は、1973年までティン・トゥハミ近くで遊牧生活をしてきたが、台地の乾燥化が進み餌となる木が生えなくなって、止むを得ずジャネットに移住した。他の遊牧者達も同時期にジャネットに移り住んだ。

Ali(英語通訳)32歳



独身。

最近7年間婚約していた女性と婚約を解消。本気で日本女性との結婚を望む。女性を娶るには駱駝15頭が相場だが、「200頭でも準備する」。

ツアレグの貴族と奴隷のハラティン

ツアレグ族はプライドの高い武闘派部族であり、ツアレグの貴族(武人)はニジェール人を奴隷(ハラティン)としていた。従ってこの地域には、鼻が高く彫が深い白人系ベルベル族(と言っても肌は相当に黒い)のツアレグ族とかつて奴隷であった黒人が住み着いている。

タマシェク語

ツアレグ族が使っている言葉。文字は上下左右どちらからでも書けるティフィナグ文字があるが、現在では学校では公用語のアラビア語、フランス語を教えることもあって書ける人は少ない。ガイドによれば、岩絵にある古代ティフィナグ文字は読むことはできても意味は通じないとのこと。

地名にTinが付くケースが非常に多いが、英語のForの意味で、後にファミリーネームが付けられて、「XX家の土地」と言った意味

合いとなる。歩いてみると非常に広く、徒歩半日近い場合もある。砂漠化の進行とともに、遊牧地が広がらざるを得なかったのが窺える。

Djabarrenのdjabarは「巨人」で、その複数形でDjabarrenとなる。Sefarは川の名前。

双子の物語(通訳のAliから)

ある妊婦が遠くの村からジャネットに向かっている途中、ジャネットの直前で倒れた。誰も通りかかる人はなく妊婦は帰らぬ人となったが、双子の子供が無事産まれた。そしてその双子を神が守った。彼らは、現在でもジャネットで健在とのこと。母親が倒れたところを通ると今でも赤ん坊の泣き声が聞こえると言う。

参考文献

タッシリ遺跡 — サハラ砂漠の秘境

アンリ・ロート著、永戸多喜雄訳

1970年、毎日新聞社

1955-56年の調査隊活動の記録。詳細な分析は現在でも有効なものが多く、タッシリ・ナジェール壁画のバイブルとも言える。

サハラ幻想行

森本哲郎

2002年、五月書房(初出は1971年河出書房新社)

7日間の台地滞在とその前後を一冊の本にまとめているが、認識論など哲学問答が多く難解。写真家の富山治夫が同行。最近知人から「義姉が、森本哲郎のサハラに魅せられてパリを拠点にサハラ旅行を繰り返していた」との話を聞いた。上温湯隆の「サハラに死す」もあり、70年台は自分自身も含めてサハラに魅せられる若者が多かった。

サハラ縦走

野町和嘉

1993年、岩波書店(初出は1977年日本交通公社)

1975年に写真撮影のため台地に入る。その取材記が含まれている。「サハラ」1978年、「サハラ20年」1996年でも壁画の一部が掲載されている。

Tassili n' Ajjer

Jean-Dominique Lajoux

CHENE, 1977

1956年のロート隊に映画家・写真家として参加。ロートのコピー方法を批判しているが、ロートの著書の中では忠実な隊員。後になって批判するのはどうかとも感じるが、写真家としては一流。

L' Algerie Civilisations anciennes du Sahara

Tadliss N' Sahra

Editions ANEP, 2005

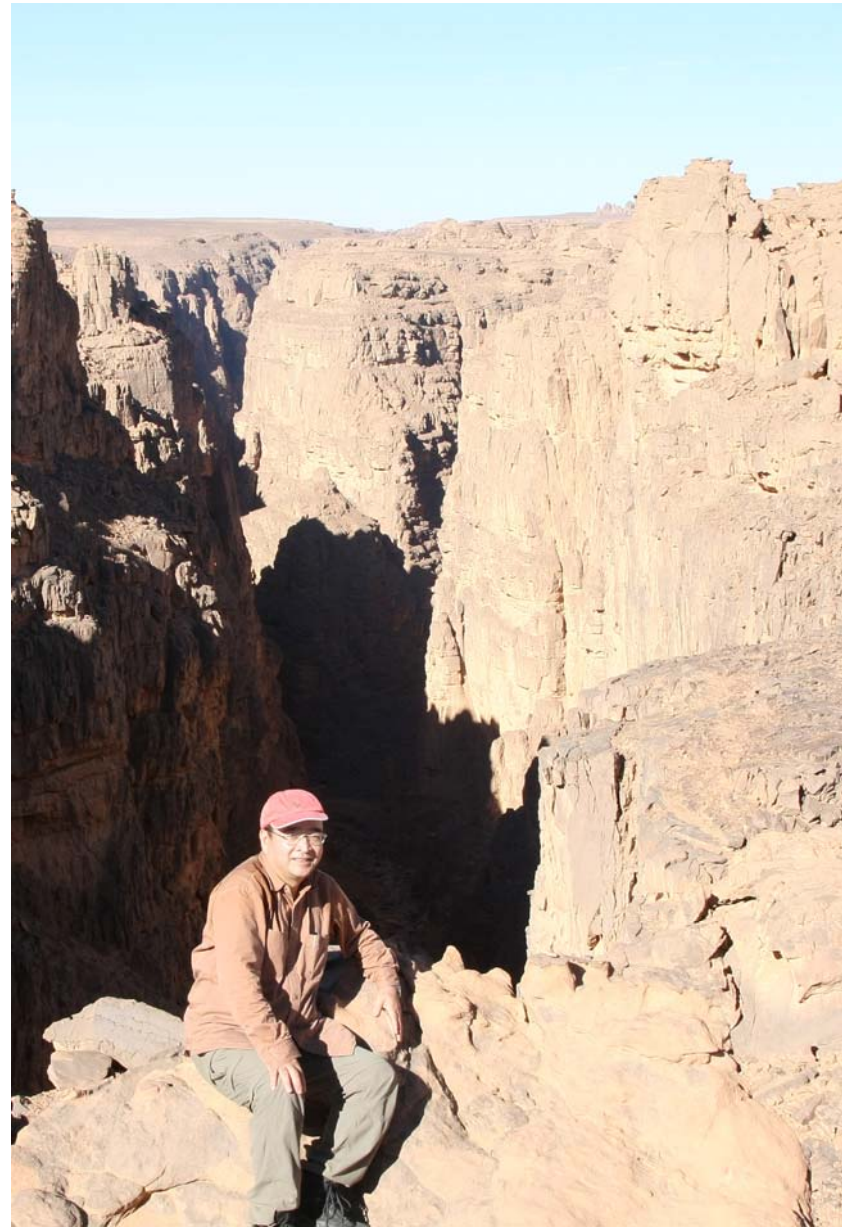
散漫な記述が多く、あまり参考にならない。

L' Art mysterieux des TETES RONDES au Sahara

Francois SOLEILHAVOUP

Editions FATON, 2007

円頭時代の壁画に焦点を当てた研究書。詳細な分析から従来の通説を否定する内容も多く面白い。



29年間をワープするセンチメンタルジャーニー。年齢と体型は戻らないが、感動の記憶は鮮やかに蘇った。
英 隆行 2009年1月